

志賀市子編

『潮州人―華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類學』

山下 一夫

初期の道教研究においては、中華圏内部における地域的差異があまり意識されない傾向があったように思う。

それは、現地調査を行う場合に、中國本土は戦後の一時期、困難を伴う状況だったため、香港や臺灣、東南アジアを選ばなければならなかったことも、理由の一つとして挙げられるだろう。もちろんそれらの地域においては、廣東系や福建系といった明白な差異が存在してはいたが、本土の調査研究ができない以上、中國全體の中での廣東や福建という、地域性に向かう議論よりも、今は見るこ

き換えられる發想が優先される傾向にあった。

しかし一九九〇年に中國本土で宗教活動が大々的に復活し、内外の研究者がそれを比較的自由に調査を行うことが可能になると、その間の道教研究の進展も相まって、中國内部での地域的差異が強く意識されるようになり、また中國本土外の調査でも、そうした視點が再認識されることとなった。

そうした中で、嶺南道教の研究で優れた成果を發表してきた志賀市子氏の編著『潮州人―華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類學』は、漢民族の下位グル

一。プである潮州人の信仰やエスニシティに焦点をあてた研究である。例えば海外華人という枠組で考えても、本邦では先述の廣東系や福建系のほか、客家系の存在は一般によく知られているのに對し、潮州人についての知名度はあまり高くない。しかし潮州人は、香港や東南アジアで大きな存在感を持っており、當該地域の道教を考え、る場合にも極めて重要である。また中國本土においても、潮州人は明清時代の文化の發展の中で大きな役割を果たしており、近現代の宗教研究において無視できない存在となっている。

本書は以下のような構成となっている。

まえがき―潮州人とはだれか(志賀市子)

序章・「潮州人」のエスニシティと文化をめぐる(志賀市子)

第I部

中國、臺灣

第一章・宣教師が見た一九世紀の潮州人(蒲豊彦)

第二章・外の世界―一八五〇年から一九五〇年の潮汕に

おける移民母村の女性(蔡志祥 川瀬由高〔譯〕)

第三章・臺灣南部の潮州系移民をめぐるエスニック關係

―陳氏一族の社會的經驗(横田浩一)

コラム①・潮州人と客家―差異と連續(河井洋尙)

コラム②・汕尾から考える「廣東三天民系」(稻澤努)

第II部 香港、東南アジア

第四章・潮州の「念佛社」とその儀禮文化―香港及びタ

イへの傳播と繼承(志賀市子)

第五章・潮州系善堂における經樂サーピスとそのネット

ワーク―マレーシアとシンガポールを中心に(黃蘊)

第六章・ベトナムの潮州人宗教結社―ホーチミン市とメ

コンデルタ(芹澤知廣)

第七章・タイ現代史の中の潮州系善堂―華僑報德善堂の

發展と適應(玉置充子)

第八章・海外華人宗教の文化適應―タイ國の徳教における「白雲師尊」像の變化を事例として(陳景熙 阿部

朋恒〔譯〕

第九章・功德がとりもつ潮州善堂とタイ佛教―泰國義徳

善堂の事例を中心に（片岡樹）

コラム③・潮州劇について（田仲一成）

上記の目次を見ても分かるとおり、本書の内容は宗教研究だけでなく、地域研究、歴史研究、海外華人研究といった非常に幅広い内容を含んでおり、評者にはもとよりその全てをカバーする能力は無い。幸い、すでに飯島典子、伏木香織、兼城絲繪の諸氏による、様々な領域の立場からの優れた書評があるので、⁽¹⁾個別の分野における評価はそれらを参照していただくとして、以下、主に評者の興味・關心から、本書の紹介を行うこととする。そのため分野的な偏向が存在するが、その點はご寛恕いただけると幸いである。

まず序章では、「本書はこれまでの華人移民のエスニシティ研究では十分とは言えなかった次の三つの點を補うことを意識して構成されている」として、「第一に、

客家と比べて日本ではこれまで正面切って取り上げられることの少なかった潮州系移民のエスニシティに焦點をあてるとともに、複数の地域における『潮州人』や『潮州文化』の比較を視野に入れた點。：第二は、歴史的な視點を重視し、執筆者にも歴史研究者を加え、近代以前の潮汕地區の社會史や移民史についても多くのページを割いている點。：第三は、華僑華人研究の負の側面、すなわち海外の華人コミュニティにおける中國製の維持・繼承を検證することが自己目的化することを避けるために、執筆者に東南アジア研究者を加え、ホスト社會において華人文化がどのように意味づけられているのかという視點を加えた點」を擧げている（二十三―二十四頁）。これはそのまま、本書の特徴であると言いうことができるだろう。

續く第Ⅰ部は中國および臺灣がテーマとなっている。

第一章では、一九世紀の宣教師の記録が取り上げられ、一九世紀初頭にタイで出會った潮州人には好意的に記す一方、一九世紀後半に潮汕地域で出會った潮州人には一

様に「野蠻」「殘忍」としているが、後者は當該地區で生存競争が激化し大量の海外移民が始まる状況を反映したものだとする。第二章では、潮汕地域が海外移民によって男性不在となる中、留守を預かる女性たちが主たる稼ぎ手となり、企業家として活躍する者まで現れたことを、土地證書などの資料から明らかにする。第三章では、

臺灣屏東縣の陳氏が一族の故郷である潮州市饒平縣の陳氏と共同で近年作成した家譜について、臺灣にも潮州移民が来ていたことを解明した、臺灣側の最新の研究成果を参照しつつ、家譜に見られる潮州人としてのアイデンティティに關わる言説を分析する。コラム①では、廣東省で隣り合う「潮州人」と「客家人」は實は共通の要素が多く、文化的にも連続しているので、これを初めから異なるエスニック・グループと決めつけるのではなく、兩者のカテゴリの生成過程を丹念に検討してゆく必要があるとする。コラム②では、廣東省には「廣府」「客家」「潮汕」の「三大民系」があるとされ、「汕尾」、すなわち海陸豐地域は、外部からは「潮汕」の一部と見な

されるが、當事者である潮汕地域および海陸豐地域の人々は「汕尾」と「潮汕」は異なると考え、とりわけ移民先の香港ではそれが顯著であるとする。

以上の第I部は、潮州人が潮汕地域から移民として海外に赴き、現地でアイデンティティを形成ないし消滅させていくまでを、時系列で示す構成となっている。道教との關連で重要なのは、臺灣における福建系と客家系の別や、三山國王廟の性質といった、これまで當たり前のごとくに語られてきたことの中に、實は潮州人というファクターが存在し、そこに多くの虚構が含まれていふということである。こうした點は今後、臺灣における信仰を考える上で十分注意されなければならないだろう。第II部は香港および東南アジア、特にそこで展開されている潮州系の善堂がテーマとなっている。第四章では、潮州系善堂の中でも念佛社を取り上げ、香港とタイで行われている儀禮について詳述し、これが潮州人のアイデンティティの強化やネットワーク作りの上で重要な役割を擔っていることを指摘する。第五章では、マレーシア

とシンガポールにおける潮州系善堂の儀禮活動を紹介・整理した上で、同じく潮汕地域に由来する宗教信仰でも、教團組織を持ち明確な宗教的理念を有する徳教と異なり、善堂は潮州音楽と結びついた葬儀サービスの提供を核として發展しているとする。第六章では、ベトナム南部における潮州系善堂の現状を報告した上で、華人人口では廣府人よりも少ない潮州人の善堂文化、とりわけ潮州音楽による葬儀サービスが、潮州人の枠を越えて廣東系の廣府人やベトナムの主要民族であるキン人にも広がっていることを指摘する。第七章では、華僑報徳善堂が都市部の王族や財閥に支持されて發展し、さらにボランティア活動によって一般民衆にも広く認知され、タイを代表する潮州系善堂となるまでの、およそ一世紀あまりの歴史が述べられている。第八章では、潮汕地域に由来する徳教が、「白雲尊師」の圖像を佛教の僧侶風に改變することで、佛教を國教とするタイで合法的な地位を獲得したとする。第九章では、タイでは華人が次第にタイ人に同化するプロセスを辿るのにも関わらず、華人とタイ人

を對立的に捉え、善堂を初めから中國宗教と規定した上で、中國的な指標だけを拾い上げるといふ、從來の調査・研究のあり方を批判し、潮州系善堂はタイの上座部佛教サンガと竝立的に存在しているのではなく、その下位分節として包攝されていることが指摘されている。コラム③では、潮汕地域や香港で行われている潮州劇について、その形成や演目などを解説する。

以上の第II部は、香港や東南アジアに廣がる潮州系善堂信仰のパスpekティブを得られるという價値はもとより、第九章で展開されている從來の海外華人宗教研究に對する批判は、極めて重要な内容を含んでいる。なお氣になったのは、コラム③の「地方派戲曲は：地域を越えて他の方言グループに傳わることはない。従って、全國に三〇〇種あるエスニック・グループごとに、三〇〇種の地方劇が存立している」（三九〇頁）という記述である。これは、著者自身が海陸豊劇に正字戲と白字戲の二種類があることとの兼ね合いを考えても、受け入れ難い言説である。

ちなみに本書の編集作業が進んでいた頃、評者はちょうど臺灣南部の影繪人形劇が潮州移民由来であるとする論考を執筆中で、編者から本書の元となった共同研究の内容を伺い、その成果の一部を取り入れることもできたが、出版後であればより多くの内容を参照できたのにと思ふと、返す返すも残念である。本書の出版を受け、個人的にも今後の研究に役立てて行ければと思ふ。

(A5判、四二四頁、風響社、二〇一八年二月、
五〇〇〇圓(税別))

註

- (1) 飯島典子、『文化人類學』八四卷二號、一九一—一九二頁、二〇一九年。伏木香織、『東南アジア研究』五七卷一號、九四—九八頁、二〇一九年。兼城絲繪、『華南研究』第五號、七七—八一頁、二〇一九年。